國學院大學学術情報リポジトリ

Yoshio Mase Editor in Chief, The Dictionary of Dialects in Nagano Prefecture, Special Edition

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Kuno, Makoto
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000084

〔紹介〕

馬瀬良雄編集代表『長野県方言辞典［特別版］』

久野　眞

本書は二〇一〇年に発行された『長野県方言辞典』の特別版としてあらたに編集されたもので、この種の出版物としては特別な経緯を辿ったものと言える。

ここでは最初に『長野県方言辞典』の特色と出版の経緯をまず述べ、後に『長野県方言辞典［特別版］』（以下『特別版』と略す。）について述べる。

『長野県方言辞典』は信州大学名誉教授、故馬瀬良雄氏が編集代表となって作成されたA4版七五〇頁余の大著である。目次は以下の通り。

長野県方言概説　一頁
長野県方言集成　二五頁
凡例　二六頁
Ⅰ方言集成　三二頁
Ⅱ秋山郷の方言　五二三頁
秋山郷の方言／索引　五八二頁
「長野県方言集成」に用いた資料　五八三頁
明治二四年「方言調」　五八九頁

テキスト方言訳　六五九頁
長野県方言地図　六九七頁
長野県方言研究の回顧と展望　七三九頁
『長野県方言辞典』の編纂過程　七四五頁
参考文献　七四七頁
あとがき　七四九頁

このうちI方言集成は長野県にある方言集三四点を統合・編集したもので、方言辞典の本体とも言える部分である。出野憲司氏執筆の編纂過程によると最初の企画は方言集から約二〇点を選び、方言集成を作成した上で、調査項目を選び、臨地調査による資料を加えて方言辞典に作り上げるものだったという。しかし軌道修正が行われ、すべての方言集にある資料を辞典に盛り込み後世に残す、臨地調査に基づく方言地図を作成するなどの方針変更が決められて現在の内容に決定された。

最終的に出来上がった内容を見ると、他の多くの方言辞典とおもむきが異なる点がさまざまに見られる。まず、長野県方言概説の部分は音韻・アクセント・語法の特色が長野県全域と各方言区画、すなわち奥信濃・北信・東信・中信・南信について記述されている。さらに方言の成立と変化についての考察が加えられている。

方言集成の作成は表計算ソフトのエクセルに入力し、そのデータを辞典に編集するために組まれたソフトを利用して作業が進められたという。その方言集成とは別に「秋山郷の方言」として『信越の秘境　秋山郷のことばと暮らし』に収録された語彙を掲載している。これは資料の性格が他の方言集と異なるためかそれとも方言の性格が特殊だということに着目したためか説明がされていないが、察するに語彙が分野別に分類されていたため、そこから見えてくる言語生活の有様を大切にしたためではないか。秋山郷は山に囲まれて狩猟生活を中心とする独特の文化があり、音韻体系も周辺の諸方言とは異なるため、語彙が五十音順に配列し直されて他の方言語彙の中に埋もれてしまうと分野別に整理されていた語彙の価値が失われてしまうことを惜しんだのであろう。

明治二四年「方言調」は解題によると長野県知事官房が明治二四年七月一日付で各郡に通牒を出し、提出させたものという。文部省国語調査委員会が明治三三年に各府県に調査を依頼して報告書が明治三六年に出版された口語法調査に先立つこと十二年の出来事である。資料の量・質にばらつきが大きいが、この時期に調査が行われたということに意味があると言える。

この資料に関しては二〇一〇年日本方言研究会第九〇回研究発表会で「長野県の方言新資料を追う—明治二四年方言調、音韻並ニ口語法ニ関スル調査書等—」（発表者　馬瀬良雄、遠藤旭、大橋敦夫、出野憲司）として発表された。

テキスト方言訳は各方言区画から代表的な地点を選び、方言間の比較が可能になることを目的として作られた。言語生活を反映させるような場面を用意し、登場人物がどのような会話を交わすかを、方言ごとに高年層の協力者の内省を調査者が引き出すという方法が取られた。場面は六種類用意されたが紙幅の関係で三種類だけ掲載された。

方言資料一般を振り返ると音韻・アクセント、文法の面は論文の形になることが多い。この辞典のように概説で一般には理解できないほど高度な記述がなされることは少ない。語彙の記述には意味の説明だけでなく例文も示す必要があるという認識はわずかながら広まってきたと思う。しかし、方言辞典は会話を示すということをしてこなかった。会話そのものを示すことによって方言の運用面における記述が可能になる。さらには音声と動画を付け加える試みがいずれ、どの方言資料においても行われる日が来るはずだが、そのときには初期の段階の代表として『長野県方言辞典』が評価されるであろう。

なお、国立国語研究所の『全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成』は自然談話の採録に際して若干の注釈を加えたものだが、全国を容易に比較できるほど場面の設定が統一されていない。

次に方言地図は二三枚とその解説だけである。実際には二三六項目を五五地点について調査したとある。言語地理学の研究者としても著名な馬瀬氏がこれで満足したとはとうてい思えないがすでにページ数が膨大なものになっている。様々な制約からごく一部しか発表できなかったことは残念だっただろうと推察する。なぜなら馬瀬氏が三〇年以上前に発表した長野県言語地図との比較可能な項目および新しく加えた項目により調査の進展を示すことができたはずだからである。

さて、この大著は定価一万六千円という価格にもかかわらずすぐに売り切れてしまった。そしてわずか三年後に『特別版』が出版される。

『特別版』は価格を下げて広く一般に入手しやすくするために大胆な簡略化を行った。すなわち長野県方言概説、秋山郷の方言、明治二四年「方言調」、テキスト方言訳をすべて省略したのである。右に述べた学問的に価値のある部分を一般には分かりづらいということですべてなくしてしまったとも言える。

ただそれだけなら何も三年もかける必要も無かったのだが、新しく加えられた部分がある。それが共通語索引である。この部分は共通語引きの方言辞典とも通ずる部分があるが、方言研究をする上で非常に役立つものである。方言辞典を作ろうとする場合、最初にどのような語彙項目や例文を設定するかは拠り所がなく雲を掴むような話である。その時に役立つのが共通語引きの方言辞典である。『特別版』の索引を見てみると、例えば「赤ん坊」の項に赤ん坊の方言形が二六語書かれていて参照項目に「誕生」が示されている。そして下位項目に「女の赤ん坊」「赤ん坊の最初の糞」「赤ん坊の便所参り」「赤ん坊を外出させる日」「赤ん坊が手を口に入れること」「赤ん坊がかわいいさま」が立てられている。さらに「歩き初め」は「歩く」を参照するようになっている。これだけでも赤ん坊に関する文化的民俗的な記述が幾分かできてしまいそうである。そして索引が全体の二割強のページ数を占めている。内容的には大きく削減されたわけだが、学問的価値は損なわれていないと考えることができる。しかも定価は四分の一の四千円である。一般の読みやすさを残し、しかも実用的に発展させたとさえ言える『特別版』の企画は快挙である。

ところで編集代表の馬瀬良雄氏は出野憲司氏についてあとがきで二〇〇七年馬瀬氏の入院以後は編集委員長として全体をまとめられたと賞賛している。出野氏は院友で現在伊那西高校の校長として教育界で活躍する一方、新聞のコラムに執筆、出版するなど方言の研究にも邁進している。『特別版』は出野氏がほぼ全責任を負っての出版になった模様である。出野氏が長野県の方言研究でますます発展されることを願っている。

（A5判、七八六ページ、信濃毎日新聞社、二〇一三年十月一日特別版発行、定価四〇〇〇円＋税）